

#S7 キルシュヴァッサー篇 -T. C. 4753

私は――試作型 097 号。
プロトタイプが完成するまで、
幾多の実験が試みられていく、その一過程――
でも私は、幸せだった。
私たちの存在は、必要なものだったから。
――お父さまのために。
だけど、その日は――いつか来る。
モモ[プロトタイプ]が誕生し、
私たちの存在理由がなくなる、その日が――

#S7 キルシュヴァッサー篇 -T. C. 4753-

??? : ―――
目覚めよ――
目覚めるのだ、創られし子よ――
キルシュヴァッサー：あなたは――誰――？
う――うん――
??? : 覚醒したようだな、創られし子よ。
お前には、すでに一次学習が完了しているはずだ。
自分と――そして私が何者か、わかるか？
キルシュヴァッサー：はい――私はキルシュヴァッサー、シリアル No. 097。
あなたは――

セラーズ博士、ですね。

セラーズ：その通りだ、ミズラヒの遺せし子よ。

キルシュヴァッサー：遺せし子ーーーー？

セラーズ：そうだ、奴は先刻、自らを裁き、この世界から逃避した。

キルシュヴァッサー：！！

お父さまがーーーー

セラーズ：そうだ、己が研究成果が多くの生命を奪っていくー

その光景に、奴の精神は耐えられなかったのだ。

キルシュヴァッサー：ーーーーー

セラーズ：だが、奴の献身にも関わらず、

煉獄の扉は開かれた。

グノーシスが、この世界に解き放たれたのだ。

ーと言っても、

それが意味するところを、世界が変貌していく末を、

お前は理解できまい。

キルシュヴァッサー：あのーすみませんーーーー

セラーズ：ふん、ミズラヒめ。亡き娘に似せたとはいえ、こんな人形をよくも作ったものだ。

ーとはいえ、キルシュヴァッサー[試作型]の大部分は破棄され、完成した百式は、連邦の手に落ちた。

貴様一体だけでも確保できたのは、僥倖というものだろう。ーーーーくっ。

キルシュヴァッサー：セラーズ博士ーーーー？

！　ー博士、脚がー！

セラーズ：ーーーーー問題はない。

ミズラヒの銃弾を受け、さらにグノーシスと接触までした結果だ。

命を長らえただけでも、よしとせねばなーーーー

キルシュヴァッサー：あの、すぐナノ治療を施せばーーーー

セラーズ：ーーーーよい。この傷は、戒めだ。

あの男への敵愾心、執着ーそんなもので、なすべきことを忘れたー

自分自身への、な。

キルシュヴァッサー：ーーーーー

セラーズ：お前にしてもらわねばならぬことは、他にある。

ーここがどこだか、お前にはわかるか？

キルシュヴァッサー：はい、惑星ミルチア首都郊外ーネピリムの歌声発生装置、その制御室です。

セラーズ：そうだ、この装置はそれ自体が独立稼動する航宙機としての機能を有している。

私はこれより、ミルチアを脱出する。お前は、これを制御せよ。

キルシュヴァッサー：脱出ーーーー？

セラーズ： そうだ、間もなくこの星の命運はつきる。

グノーシスに食い荒らされるか、連邦艦隊の砲撃に灼かれるか、ウ・ドゥに浸食されるか―――
いずれにせよ、終焉を避けることはできない。

その前に、この装置だけでも、確保しておかねばならぬのだ。

キルシュヴァッサー： 私の内の記録にあります――博士が属する――オルムスのため、ですか？

セラーズ： ふん―――記録というものは、常に不完全なものだな。

私がオルムスに加わっていることは記されていても、その目的までは記されていない。

（もっともこの場合、その不完全さこそが私に味方してくれるわけだが――）

キルシュヴァッサー： 博士―――？

セラーズ： ふん、埒もない独語だ。気にするな―――

それより、航宙機能を起動させておくのだ。私は少し――休むとしよう。

キルシュヴァッサー： はい―――あの、その出血ですから、せめて増血剤を―――

セラーズ： 私の身体のこと、気にする必要はない。

お前はこの装置を、軌道上の天の車と邂逅させること――それだけ考えておればよい。

キルシュヴァッサー： はい、わかりました―――

キルシュヴァッサー： ――――

（さっき、博士は言っていた――

”完成した百式は、連邦の手に落ちた”――

完成したんだ、”モモ”が―――）

ヨアキム・ミズラヒ： もうすぐ――もうすぐ、お前は这个世界に誕生する――そしたら善い行いをたくさんしよう。

そうすれば――そうすればお前は、人間になれるんだよ、私の――サクラになれるんだ――

キルシュヴァッサー： ――――

キルシュヴァッサー： （あの時、お父さまに声をかけられていた子――あの子が―――

じゃあ、もう私たちの存在意義は―――）

――航宙機能の起動完了。離昇出力まで、700秒。

（ここで、この装置を軌道上に打ち上げれば、私の役目は終わる―――

もう、私に存在意義はない――）

！

これは――爆発、それも内部から！？

博士は―――

治療槽の中――起こすことはできない。
まず、状況を確認しないと――――
爆発の発生箇所は――第一層最深部――――？
映像を出すには――――
これを――――

――

ニグレッド： アルベド――僕は、君を止めなければならない。
アルベド： ふふふ、ニグレッド――ようやく正体を現したね。それが君の本性だ。
ルベド： ―――――
アルベド： よかったねえ、ニグレッド。ルベドに”処刑人”としての姿を見られてなくて――――
ニグレッド： ああ、その通りだ。自分の力を――制御しなくてすむ。

――

キルシュヴァッサー： （あの子たちは――なにをしているの――――）
！ ―――あの子たちのことも、私は知っている――――
U.R.T.V. ―――ディミトリ・ユーリエフ博士が産み出した、デザイナーズチャイルド。
彼らも、このミルチアに投入されていたなんて――――
だとしたら、その目的は――――！？
（はやく、歌声を退避させないと――――！）
離昇手順を 21 より 138 まで省略。出力確保と同時に、離昇開始。
（ううん、その前に、あの子たちを排除するべき――――
第一層の南ブロックは、離昇時に切り捨てられていく。そこに誘導できれば――――）

――

ニグレッド： くそっ、仕留め損なった――
アルベド： どうした、ニグレッド！ はやくしないと、ルベドが目覚めちゃうよ。
ニグレッド： そんなに時間はかからないさ あと少しさ――あとほんの少し！
――――はあっ！
アルベド： ふふ、怖い怖い。でも――僕には効かないよ。

ニグレド：はあああっ！

アルベド：ひやはははっ！

—

キルシュヴァッサー：きゃああああっ！

（いま、強いエネルギー同士激突した———な、なにが起こったの？

U.R.T.V. は———

よかった、二体は第一層の南へ落ちてくれた——）

今度はなに———？

機動兵器の侵入———？

（あの機体は———

なにもせずに去っていった——？

ううん、U.R.T.V. を回収に来たのね

よかった、これで———装置を離昇させられる——）

航宙機能の出力確保、離昇まであと 30 秒——

10 秒——

5、4、3、2、1———離昇。

離昇は問題なく行われた。

航宙機能が正常に機能すれば、重力を振り切った後———

衛星軌道上に定位する天の車の軌道へと、

この装置を遷移していくはず———

それまで、なにもすることはない———そう思っていた———

なのに———

私は、ある予感がして、第一層の様子を見に行った。

そこで、出逢った———

あの人に———

???：うーうー

キルシュヴァッサー：！ そんな――

U.R.T.V.がまだ、残っていたなんて――

（掌に、固体ナンバーが記されている。ナンバー667・アルベド――）

アルベド：――げ、げほげほ――

キルシュヴァッサー：（目覚めた――？

どうしよう、ここには武器もなにも――）

アルベド：はあ、はあ――うーげほ――

キルシュヴァッサー：（生体反応が低下している？ いったいどうしてこんな――）

あの、無理――しないで。

いまナノ治療の準備、するから――

アルベド：く、うう――お、お前は――誰だ――
――！？

お前は――

サクラ・ミズラヒ！？

キルシュヴァッサー：え――？

アルベド：なぜ、お前が生きている？

今度こそ――

今度こそ――殺してやるっ。

キルシュヴァッサー：きゃああっ！

（く、苦しい――

息が――）

アルベド：お前が――

お前がいるから――

ごほっ、ごほごほ――

キルシュヴァッサー：（腕の力が――ゆるんだ――）

アルベド：げほっ、げほげほ――

キルシュヴァッサー：あの――

大丈夫――――

アルベド： さ、触るなよ――――お前なんかに、お前なんかに――

キルシュヴァッサー： （この人、間違えてる――――

私を――――私たちの生体モデル、サクラ・ミズラヒと――――）

あなた――代謝反応が低下してる。――――休まないと。

アルベド： はあ、はあ、はあ――よせ、僕に――触るな――

そんなつもりじゃない――僕はあの時、そんなつもりじゃなかった――んだ――！

ごほごほ――――

なんでお前、死んじまったんだよぉ――

ルベドのために――――お前は死んじゃダメだったんだよぉ――

キルシュヴァッサー： ―――――

あの――――

アルベド： う、うううう――――

キルシュヴァッサー： 泣かないで、アルベド――――

私は、生きてる――

（違う、これは私が言うべき言葉じゃない――――）

私は、ここにいるから――――

（違う、違うのに――――）

アルベド： ―――生きてる、のか？

生きていてくれた、のか？

キルシュヴァッサー： ええ、だから――――

いまは眠って、アルベド――――――

アルベド： う、ううう――――

キルシュヴァッサー： ―――――

アルベド： ―――――

キルシュヴァッサー： （目覚めた時、この子はどう思うだろう――――

自分をだました私を、憎むだろうか――――

でも、いまは――

いまだけは――――

この子にとって、私は必要な存在となっているのかもしれない――――

たとえ、代用品だとしても————)

————こうして私は、あの人[アルベド]と出逢った。
そして、ある予感がしていた。
プロトタイプが完成して、存在理由を喪った試作型————
でも、私はまだ生きている。
幼体擬装のまま、
歳をとらない私たちには、時間が与えられている。
それはきっと————
自分を必要としてくれる人を、
自分で探しにいけるだけの時間だと———思っていたい。